
序

近年、統合失調症、気分障害、強迫性障害、解離性障害、転換性障害、摂食障害などの従来の精神疾患の基底に、あるいはその背景に、発達障害とくに広汎性発達障害が認められる例が増えている印象を多くの臨床家をもつようになりました。発達障害が広く認知されるに従い、成人の精神医療を受けていた人たちの中にも、発達障害の知識が増え診断ができるようになったということが関係しているかもしれません。また、時代・文化の変容も影響している可能性があるかもしれません。まだ、わからないことが山積みです。

今でも成人期の臨床における広汎性発達障害というのはピンとこないという声を聞くこともありますし、その一方で、成人期において、広汎性発達障害が過剰に診断されるようになったということへの危惧の声を聞くこともあります。どうやら事態は依然として混沌としているようなのです。しかし、いずれにしても成人を診る精神科医にも、広汎性発達障害の診断や対応ができることが、今や必須のことになってきています。

しかし、広汎性発達障害についてのこれまでの成書は、幼児期や学童期から広汎性発達障害だと診断され、養育や指導がなされてきた事例を中心に考えられています。「主診断としては従来の精神疾患なのだが、広汎性発達障害も伴っていて、それが見過ごされてきていた」事例への対応を主眼とした成書はこれまでありませんでした。

本書は、すでに幼児期・学童期から広汎性発達障害と診断され、療育や教育的配慮がなされている群ではなく、それまでも軽微な広汎性発達障害の傾向をもっていたかもしれないが、成人期になって顕在化してくる広汎性発達障害について、一般精神科医がどう理解し、どう援助するか、について書かれています。

それぞれのトピックスについて、現在、最前線で臨床に携わっておられる諸先生に、執筆を依頼しました。お忙しいなか、ご執筆頂いた諸先生に心よりお礼申し上げます。また、本書が、現在、成人期の臨床に携わっておられる諸先生に、少しでも示唆を与えるものになることを心より願っています。

2011年10月

青木省三，村上伸治

CONTENTS

I 総論

1. 成人期の発達障害について考える ————— 青木省三 2
2. 成人期の広汎性発達障害とは何か ————— 滝川一廣 17
3. 成人期の広汎性発達障害の診断 ————— 宇野洋太, 内山登紀夫 28
4. 「発達障害ではないか」と受診してくる成人たち — 太田晴久, 湯川慶典, 加藤進昌 37
5. 生物学的研究から ————— 加藤元一郎 46
6. 長期経過・長期予後 ————— 中根 晃 64
7. 発達障害当事者から—あふれる刺激 ほどける私 ————— 綾屋紗月 70
8. 発達障害当事者から—大人として生きるということ ————— ニキ リンコ 84

II 従来の精神疾患との関連

1. 統合失調症 ————— 吉川 徹 94
2. うつ病 ————— 阿部隆明 104
3. 双極性障害 ————— 義村さや香, 十一元三 113
4. 摂食障害 ————— 山下 洋 124
5. 強迫性障害 ————— 山下陽子 133
6. 解離性障害・転換性障害 ————— 松井裕介, 田中 究 141
7. パーソナリティ障害 ————— 加藤 敏 148

III さまざまな援助

1. 大学生への援助 ————— 川瀬英理, 片岡 聡, 佐々木 司 164
2. デイケア ————— 岡田 俊 175
3. 当事者支援 ————— 田井みゆき 182

CONTENTS

4. グループ療法	辻井正次, 森 一晃, 加藤幹紀	192
5. 当事者グループ	石井哲夫	199
6. 発達障害の神経作動特性（≒神経過敏 + 切替困難）へのアプローチ	三好 輝	209
7. 薬物療法	太田豊作, 飯田順三	243
8. 私の精神療法的アプローチ—「生き方サポート」「生き方訓練」から始める 精神療法的アプローチ	宮川香織	252
9. 私の精神療法的アプローチ—精神科医の総合診療	井原 裕	261
10. 私の精神療法的アプローチ—広汎性発達障害への精神療法	村上伸治	270
索引		282